

漢の明夜夢みしにより、迦・竺二人の聖人初めて長安のとぼそに臨みしより以来、唐の神武皇帝に至るまで、天竺の仏法震旦に流布し、梁の代に百済国の聖明王より我が朝の人王三十代欽明の御宇に仏法初めて伝ふ。其れより已来一切の經論・諸宗、皆日域にみたり。幸ひなるかな、生を末世に受くといへども、靈山のきゝ耳に入り、身は辺土に居せりといへども、大河の流れ掌に汲めり。但し委しく尋ね見れば、仏法に於て大小・権実・前後のおもむきあり。若し此の義に迷ひぬれば、邪見に住して、仏法を習ふといへども還りて十悪を犯し、五逆を作る罪よりも甚だしきなり。爰を以て世を厭ひ道を願はん人、先づ此の義を存ずべし。例せば彼の苦岸比丘等の如し。故に大經に云はく「若し邪見なる事有らん、命終の時正に阿鼻獄に墮つべし」と云へり。

問ふ、何を以てか邪見の失を知らん。予不肖の身たりといへども、随分後世を畏れ仏法を求めんと思ふ。願はくは此の義を知り、若し邪見に住せば、ひるがへして正見におもむかん。答ふ、凡眼を以て定むべきにあらず。浅智を以て明らむべきにあらず。經文を以て眼とし、仏智を以て先とせん。但恐らくは、若し此の義を明かさば、定めていかりをなし、憤りを含まん事を。さもあらばあれ、仏勅を重んぜんにはしかず。其れ世人は皆遠きを貴み近きをいやしむ、但愚者の行なひなり。其れ若し非ならば遠くとも破すべし。其れ若し理ならば近くとも捨つべからず。人貴むとも非ならば何ぞ今用ひん。伝へ聞く、彼の南三北七の十流の学者、威徳ことに勝れて天下に尊重せられし事、既に五百余年まで有りしかども、陳隋二代の比、天台大師是を見て邪義なりと破す。天下に此の事を聞きて大きに是をにくむ。然りといへども、陳王・隋帝の賢王たるに依りて、彼の諸宗に天台を召し決せられ、邪正をあきらめて前五百年の邪義を改め、皆悉く大師に帰伏す。又我が朝の叡山の根本大師は、南都・北京の碩学と論じて、仏法の邪正をたゞす事皆經文をさきとせり。今当世の道俗・貴賤、皆人をあがめて法を用ひず、心を師として經によらず。之に依りて或は念仏權教を以て大乘妙典をなげすて、或は真言の邪義を以て一実の正法を謗す。是等の類豈大乘誹謗のやからに非ずや。若し經文の如くならば、争でか那落の苦しみを受けざらんや。之に依りて其の流れをくむ人もかくの如くなるべし。

疑ひて云はく、念仏真言は是或は權或は邪義、又行者或は邪見或は謗法なりと。此の事甚だ以て不審なり。其の故は弘法大師は是金剛薩埵の化現、第三地の菩薩なり。真言は是最極甚深の秘密なり。又善導和尚は西土の教主弥陀如来の化身なり。法然上人は大勢至菩薩の化身なり。かくの如きの上人を豈邪見の人と云ふべきや。答へて云はく、此の事本より私の語を以て是を難ずべからず。經文を先として是をたゞすべきなり。真言の教は最極の秘密なりと云ふは、三部經の中に於て蘇悉地經を以て王とすと見えたり。

全く諸の如来の法の中に於て第一なりと云ふ事を見ず。凡そ仏法と云ふは、善悪の人を  
忽らばず、皆仏になすを以て最第一に定むべし。是程の理をば何なる人なりとも知るべ  
きなり。若し此の義に依らば経と経とを合はせて是を校すべし。今法華経には二乗成仏  
あり。真言経には之無し。あまつさへ、あながちに是をきらへり。法華経には女人成仏之  
有り。真言経にはすべて是なし。法華経には悪人成仏之有り。真言経には全くなし。何  
を以てか法華経に勝れたりと云ふべき。又若し其の瑞相を論ぜば、法華には六瑞あり。  
所謂雨華地動し、白毫相の光、上は有頂を極め下は阿鼻獄を照せる是なり。又多宝の  
塔大地より出で、分身の諸仏十方より来たる。しかのみならず、上行等の菩薩の六万恒  
沙・五万・四万・三万、乃至一恒沙・半恒沙等大地よりわきいでし事、此の威儀不思議  
を論ぜば何を以て真言法華にまされりと云はん。此等の事委しくのぶるにいとまあらず。  
わずかに大海の一滴を出だす。爰に菩提心論と云ふ一卷の文あり。竜猛菩薩の造と号  
す。此の書に云はく「唯真言法の中に即身成仏す。故に是三摩地の法を説く。諸教の中  
に於て欠いて書さず」と云へり。此の語は大いに不審なるに依りて、経文に就いて見る  
に、即身成仏の語は有れども即身成仏の人全くなし。たとひ若しありとも、法華経の中  
に即身成仏あらば、諸教の中にをいてかいて而もかゝらずと云へる、此の事甚だ以て不可  
なり。但し此の書は全く竜猛の作にあらず。委しき旨は別に有るべし。設ひ竜猛菩薩の  
造なりともあやまりなり。故に大論に、一代をのぶる肝要として「般若は秘密にあらず  
二乗作仏なし。法華は是秘密なり二乗作仏あり」と云へり。又云はく「二乗作仏あるは  
是秘密、二乗作仏なきは是顕教」と云へり。若し菩提心論の語ならば、別しては竜樹の  
大論にそむき、総じては諸仏出世の本意、一大事の因縁をやぶるにあらずや。今竜樹  
・天親等は皆釈尊の説教を弘めんが為に世に出づ。付法蔵二十四人の其の一なり。何ぞ  
此くの如き妄説をなさんや。彼の真言は是般若経にも劣れり。何に況んや法華に並ばん  
や。而るを弘法の秘蔵宝鑰に、真言に一代を撰ずるとして法華を第三番に下し、あまさ  
へ戯論なりと云へり。謹んで法華経を披きたるに、諸の如来の所説の中に第一なりと云  
へり。又、已今当の三説に勝れたりと見えたり。又薬王の十喩の中に法華を大海にたと  
へ、日輪にたとへ、須弥山にたとへたり。若し此の義に依らば、深き事何ぞ海にすぎん。  
明らかなる事何ぞ日輪に勝れん。高き事何ぞ須弥に越ゆる事有らん。喩へを以て知りぬ  
べし。何を以てか法華に勝れたりと云はん。大日経等に全く此の義なし。但己が見に任  
せて永く仏意に背く。妙楽大師曰く「請う眼有らん者は委悉に之を尋ねよ」と云へり。  
法華経を指して華嚴に劣れりと云ふは豈眼ぬけたるものにあらずや。又大経に云はく「若  
し仏の正法を誹謗する者あらん、正に其の舌を断つべし」と云へり。嗚呼、誹謗の舌は  
世々に於て物云ふことなく、邪見の眼は生々にぬけて見ること無からん。加之「若  
し人信ぜずして此の経を毀謗せば、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」の文の如く  
ならば、定めて無間大城に墮ちて無量億劫のくるしみを受けん。

善導・法然も是に例して知りぬべし。誰か智慧有らん人、此の謗法の流れを汲みて共

に阿鼻の焔にやかれん。行者能く畏るべし。此は是大邪見の輩なり。所以に如来誠諦の金言を案ずるに云はく「我が正法をやぶらん事は、譬へば獵師の身に袈裟をかけたるが如し。或は須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支仏及び仏の色身を現じて我が正法を壊らん」といへり。今此の善導・法然等は、種々の威を現じて、愚癡の道俗をたぶらかし、如来の正法を滅す。就中、彼の真言等の流れ、偏に現在を以て旨とす。所謂畜類を本尊として男女の愛法を祈り、庄園等の望みをいのる。是くの如き少分のしるしを以て奇特とす。若し是を以て勝れたりといはゞ、彼の月氏の外道等にはすぎじ。彼の阿竭多仙人は十二年の間恒河の水を耳にたゝへたりき。又耆闍仙人の四大海を一日の中にすひほし、拘留外道は八百年の間石となる。豈是にすぎたらんや。又瞿曇仙人が十二年の程、釈身と成り説法せし、弘法が刹那の程にびるさなの身と成りし、其の威徳を論ぜば如何。若し彼の変化のしるしを信ぜば即ち外道を信ずべし。当に知るべし、彼の威徳有りといへども、猶阿鼻の炎をまぬかれず。況んやわづかの変化にをいてをや。況んや大乘誹謗にをいてをや。是一切衆生の悪知識なり。近づくべからず。畏るべし畏るべし。

仏曰はく「悪象等に於ては畏るゝ心なかれ、悪知識に於ては畏るゝ心をなせ。何を以ての故に。悪象は但身をやぶり意をやぶらず、悪知識は二つ共にやぶる故に。此の悪象等は但一身をやぶる、悪知識は無量の身、無量の意をやぶる。悪象等は但不浄の臭き身をやぶる、悪知識は浄身及び浄心をやぶる。悪象は但肉身をやぶる、悪知識は法身をやぶる。悪象の為にころされては三悪に至らず、悪知識の為に殺されたるは必ず三悪に至る。此の悪象は但身の為にあだなり、悪知識は善法の為にあだなり」と。故に畏る可きは大毒蛇・悪鬼神よりも、弘法・善導等の流れの悪知識を畏るべし。略して邪見の失を明かすこと畢んぬ。

此の使ひあまりに急ぎ候ほどに、とりあへぬさまに、かたはしばかりを申し候。此の後又便宜に委しく経釈を見調へて申すべく候。穴賢穴賢。外見あるべからず候。若し命つれなく候はゞ、仰せの如く明年の秋下り候ひて且つ申すべく候。恐々

十二月五日

日 蓮 花 押

星名五郎太郎殿御返事